

## 2021年1月9日 第2回オン来ミーティング・ミーティング報告

2021年1月9日は、オンラインで運営委員会をした後、公開のオンライン・ミーティングを開催しました。

テーマは「ファシリテーターとは何だろう？」～コロナ禍の学校におけるP4Cから考える～（小学校教員からの発表をもとに）

基調報告者は小学校の教員1名

時程は午後4時から午後5時半まで

参加者は、基調報告者1名、運営委員5名、一般の参加者が13名、の計19名という形で行いました。

司会は運営委員の有賀さん

金澤さんから、ファシリテーターとは何だろう、ファシリテーターのあり方についての報告。ファシリテーターは「促進する人」というよりも「聴く人」「待つ人」であって、その雰囲気は身体的に「柔らかい雰囲気」ともいえる。高圧的な雰囲気ではP4Cはうまくいかない。教師は子どもにとって、「聴いてくれる人」。このことがあって、子ども同士が聞き合うという横のつながりができ、さらに教師も探求の共同体のメンバーとなって、輪の中に入っていく。

探求の共同体はフラットな関係のなかでの学びの場であり、その場を作ってくれるのに決定的な役割を果たしてくれるのがコミュニティ・ボール。コミュニティ・ボールは単なるコミュニケーションのツールではない。

おおよそそのような報告の後、質疑応答に入った。

Q1：対等な目線ということは、興味深かったが、学校という管理社会では葛藤や矛盾はないか。

A：やはり、学校なり周りの先生方に理解してもらおう努力をする必要がある。

Q2：知的安心感が大事と言われるが、心理的に相手を傷つけることもあるのではないか。

A：相手が傷つくような発言が出ないわけではないが、知的安心感のあるクラスでは、例えば、周りの子がそのような場を補ってくれることがある。

Q3：P4Cとは何か、あるいは哲学対話とは何か。

A：難しいことではなく、身の回りのことを自分の言葉で語る。自分はあまり「哲学的」という言葉は使わなくなってきている。自分の中にあるもやもやしているものを言葉に出してみる、それを共に語ることによって、自分の考える力が発達する。

Q4：ゼミの大学生は指示してくれることを望んでいる、その方が落ち着くと考えているが、

何か助言は？

A：学生の興味のあることを話題にして、対話を少しずつ重ねるとしか言えない。

Q5：コミュニティ・ボールは有効だと思うが、コロナ禍でのオンライン会議ではどうするか。

A：これは、難しい。【別の機会には、コミュニティ・ボールを各自に持たせて、発言の時は、それをもって手を挙げるという工夫があったように思う】

コメント

T1（金澤さんの同僚の先生）：とにかく金澤さんのクラスの子はよく話をし、人の話を（最後まで）よく聞いている。対話がつながっていく。男女の仲がいいし、どんな子でも話して受け入れてもらえるという雰囲気がある。

T2：教師の鎧を脱ぐことは難しい。黒板を前にすると安全で、教師としての権威に守られている。ここから脱しようとする、どうしてもうまくいかず、自分が傷ついてしまう。

T3：隣のクラスでP4Cをしたときは、当初は全く受け入れてもらえず、「お前なんか帰れ！」と言われてたりした。しかし、あきらめずにP4Cをしていくことで、荒れている雰囲気はなかなか克服できないが、人を傷つけるような、ある意味、陰湿ないじめみたいなものは無くなっていった。何でも話せる、何でも聞いてもらえるということから、閉じた関係が開かれていった。

アンケート結果は、様々な学校種の先生方からの率直で肯定的な感想が述べられていました。

以上。文責：榊形